様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１６２

研究課題名（和文）ベケットとヒッチコックの映像作品における視線の構造をめぐる研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Viewpoints in the Works of Beckett and Hitchcock

研究代表者
岡室　美奈子（Okamuro, Minako）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０２２１８４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題の目的は、サミュエル・ベケットとアルフレッド・ヒッチコックの映像作品を視線の構造という観点から比較検討することであった。
　まずは、ベケット『フィルム』とヒッチコック『裏窓』に、睡眠と覚醒の狭間に到来する、主体的な意思や理性では制御されえぬ起源の曖昧なイメージや言葉が看取できることを明らかにしたが、コロナ禍により当初計画していた海外での調査研究が実施できなかったため研究対象を拡大し、上記の知見が濱口竜介の映画『ドライブ・マイ・カー』（2021）に継承されていること、ベケットの先達であるW・B・イェイツの思想や作品に源流を求められることを明らかにできたことは、大きな収穫であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　不条理演劇の旗手として登場し、数々の実験的な映像作品を生み出した孤高のノーベル賞作家サミュエル・ベケットと、ハリウッドで大衆的なサスペンス映画の巨匠として活躍したアルフレッド・ヒッチコックを結びつける研究はこれまでほとんどなされてこなかったが、本研究はベケットの映像作品がヒッチコックの影響下に書かれた可能性を明らかにするものであり、ベケットと大衆文化の関係に新たな視座を提供するものである。
　また、睡眠と覚醒の狭間に、起源の曖昧な言葉やイメージが到来するというモチーフが濱口竜介の映画にも見出されることの発見は、ベケットを通じて現代文化を読み解きうる可能性を示した点でも画期的である。

研究成果の概要（英文）：This study employs the concept of "gaze structure" to compare Samuel Beckett and Alfred Hitchcock's cinematic works, uncovering recurring themes of nebulous imagery and primordial words emerging within the liminal space between slumber and wakefulness. These elements are evident in Beckett's "Film" and Hitchcock's "Rear Window."
While the pandemic necessitated a shift in research focus, a serendipitous expansion emerged. The insights gleaned from Beckett and Hitchcock were demonstrably bequeathed to Ryusuke Hamaguchi's 2021 film "Drive My Car." Moreover, the genesis of these elements can be traced back to the philosophies and works of W. B. Yeats, a clear precursor to Beckett's own artistic vision.
These findings contribute to a deeper understanding of the intertextual relationships and thematic elements that shape cinematic narrative.

研究分野：現代演劇、テレビドラマ、メディア研究

キーワード：サミュエル・ベケット　アルフレッド・ヒッチコック　濱口竜介　W・B・イェイツ　『フィルム』　『裏窓』　『ドライブ・マイ・カー』　『窓ガラスの文字』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

『ゴドーを待ちながら』（*En attendant Godot*, 1952）で知られるサミュエル・ベケット（Samuel Beckett, 1906-89）は、戯曲や小説のみならず、ラジオ、テレビ、映画の脚本も多く執筆した。とりわけテレビの脚本は『ねえジョウ』（*Eh Joe*, 1965）以来、晩年の『夜と夢』（*Nacht und Träume*, 1983）にいたるまで執筆を続け、演劇・散文と並んで創作活動の根幹を成していた。ベケットの映像作品研究の嚆矢としては、ドゥルーズ『シネマ１*運動イメージ』（Gilles Deleuze, *Cinema I: L'Image-mouvement,* Minuit, 1972)、『消尽したもの』(Gilles Deleuze, *L'Epuisé*, Minuit, 1992）などがあるが、近年はベケットの映像作品を対象とする研究も盛んになりつつある。代表的な先行研究としては、個々の作品を緻密に分析するグレイリー・ヘレン『サミュエル・ベケットの映画・テレビ作品』(Graley Herren, *Samuel Beckett's Plays on Film and Television*, Palgrave Macmillan, 2007）や、テレビの技術史にも目を向けたジョナサン・ビグネル『スクリーン上のベケット―テレビ作品について』（Jonathan Bignell, *Beckett on Screen: The Television Plays*, Manchester University Press, 2013）がある。これらの先行研究においてはベケットの映像作品が多角的に論じられてはいるものの、既存の映画やテレビ作品から具体的にどのような影響を受けたかは詳らかにされていない。ベケットが映画に強い関心を寄せていたことはよく知られているが、既存の映画からの影響を論じる際、チャップリンやマルクス兄弟、ローレル&ハーディなど、無声映画を中心とする喜劇映画から『ゴドーを待ちながら』(*En Attendant Godot*, 1952）など演劇への影響に限られており、映像作品への影響については、ルイス・ブニュエルのシュルレアリスム映画『アンダルシアの犬』(*Un Chien Andalou,* 1928）からベケット唯一の映画『フィルム』(*Film,* 1965）への影響がイーノック・ブレイター（Enoch Brater）らによって指摘されているに過ぎない。そのため極めて実験的な彼の映像作品を映画史やテレビドラマ史の流れの中に位置づけることは困難であり、ベケットという特異な作家によって突然変異のように生み出された作品群として捉えられているのが現状であった。

しかしながら、ベケットの想像力は、実は映画やテレビの豊富な視聴体験から醸成されたものではないかというのが、本研究の起点となる問いであった。ベケットは、映画、テレビの脚本を書く際に、映像技術にも目を向け、各メディアにおける表現の可能性を拓くことに挑戦し続けた。その関心の根底には、映画やテレビを楽しむ豊かな受容体験があったのではないかと考えた。

本研究は、そのような問題意識から、ベケットがどのような既存の映像作品から刺激を受け、映画やテレビの表現手法を開拓していったかを解明することを当初の目的とした。そのため、本研究では、特にアルフレッド・ヒッチコック（Alfred Hitchcock, 1899-1980）がベケットに与えた影響について考察し、さらに両者をより広い思想史・文化史の文脈の中に置いて、視線や知覚をめぐる彼らの共通基盤を探ることを目指した。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、ベケットが、カメラの視線を中心にヒッチコックからいかなる影響を受け、その技法を映画の脚本にどのように応用したか、さらに、それをどのようにテレビに移植し変容させたかを明らかにし、ベケットが映画創作を経てテレビに固有の表現方法を発見し、芸術性の高いテレビドラマを創作するに至るプロセスの一端を解明することで、ベケットの映像研究を刷新することにあった。ベケットの映像作品における実験的手法の源泉の一つが、実はヒッチコック映画にあったことが明らかになれば、これまで映像史から切り離されて論じられてきたベケットの映像作品の見方が根本的に変わり、ベケット研究を大きく転換させる契機となると予想された。それにより、ベケットの映像作品を、映像技術史をも視野に収めながら、映画史やテレビ史に正しく位置づけ直すことを目指した。さらにベケットとの接点を入口として、ヒッチコック作品を、ヨーロッパの思想史・文化史の中で捉え直すことを試みることによってヒッチコック研究にも新たな視座をもたらすことができると考えた。

ベケット研究にヒッチコックの名が登場することはこれまでほとんどなく、近年刊行されたアンソニー・パラスケーヴァの『サミュエル・ベケットと映画』(Anthony Paraskeva. *Samuel Beckett and Cinema*, Bloomsbury USA Academic, 2017）において、ヒッチコックの『めまい』（*Vertigo*, 1958）とベケットの後期テレビ作品『……雲のように……』（*…but the clouds…,* 1977）との共通点が指摘されるにとどまっている。たとえば、ヒッチコックの『裏窓』(*Rear Window*, 1954）とベケットの『フィルム』は、ともに「窃視」をモチーフとする映画であるに

もかかわらず、興行的に大成功を収めた巨匠ヒッチコックによるハリウッドのサスペンス映画と、ヴェネチア国際映画祭で新鋭批評家賞を受賞したものの興行的にはまったくふるわなかった不条理作家ベケットによる実験的映画の間に、これまでなんら接点は見出されてこなかった。しかしながら、『裏窓』と『フィルム』の映像を精査すると、ともに特異なカメラの視線が存在することに気づく。そしてその視線を軸に両者を詳細に比較検討すると、構造的類似性が確認できる。すなわち、いずれにおいても、客観的であるはずのカメラアイが独自の意思を持っているかのように主観的な動きをするシーンが存在し、そうしたシーンは主人公の睡眠と覚醒の狭間に起こるのである。ヒッチコックもベケットも無意識や精神分析に高い関心を有していたことから、いずれも主人公の肉眼とは異なる無意識の眼差しである可能性が考えられた。

それまで『裏窓』については、ローラ・マルヴィが「視覚的快楽と物語映画」(Laura Mulvey, "Visual Pleasure and Narrative Cinema", *Screen*, 1975) においてフェミニズムの視点から論じたのをはじめとして、「窃視」というテーマを中心に様々に論じられてきた。しかし応募者が問題にしている特異なカメラアイについては、たとえばデイビッド・ボードウェルが映画における「語り」の観点から主人公と観客の情報量の差異の問題として論じるように (David Bordwell, *Narration in the Fiction Film*, Routledge, 1987)、興味深い考察はなされているものの、ヒッチコックに特有の高度な映画技法の一つとして処理されるきらいがあり、独自の意思を持っているかのような奇妙な動き自体や、それが睡眠と覚醒の狭間に発生することなどには十分な考察がなされていなかった。

本研究は、この『裏窓』と『フィルム』の視線構造の類似性を手がかりとしつつ、ヒッチコックの映画を中心とする映像作品がベケットに影響を与えた可能性について考察し、その影響が、『フィルム』での試みの延長線上に捉えられるベケットのテレビ作品にまで及んでいることを明らかにすることを目指すものであった。

しかしながら、次節で述べるように、コロナ禍の影響で本研究期間中に3回予定されていた英国、アイルランド、アメリカでの調査研究ができなかったため、途中で研究目的自体を日本でも可能なものに変更せざるをえなかった。とりわけ、アイルランドと英国で予定していた思想的背景に関する研究と、アメリカで予定していたヒッチコックの思想をめぐる研究は断念せざるをえなくなった。が、その制約の中で、上記の当初研究目的で触れた、ベケットとヒッチコックに共通する睡眠と覚醒の狭間で出現する無意識のイメージや言語に着目し、むしろそれがど日本の演劇や映画に継承されていることを発見したため、それらがどのように現代に継承されているかを解明することを目指した。

３．研究の方法

本研究は、COVID-19のパンデミックにより、研究方針の変更を余儀なくされた。ここでは、当初の研究方法と、方針後の研究方法を併記する。

研究開始時において、本研究では、これまでの応募者の準備を踏まえ、ヒッチコックの『裏窓』がベケット唯一の映画作品である『フィルム』に与えた影響について考察し、両者の共通点として、カメラアイが、主人公の理性的な眼差しとは異なる無意識に関わる視線として機能していることを明らかにすることを目的としていた。そこで、トム・ガニングが、「フレームはヒッチコックの映画においてテーマに関わる重要な役割をも果たしている。とりわけ、窓や出入り口のようなインテリアを構成する、映画のフレーム内部のフレームを使用する場合は」と述べて、『裏窓』の窓枠が、見るという行為を強調していると指摘していたことを踏まえ (Tom Gunning, “Hitchcock and the Picture in the Frame.” *New England Review*, vol.28, No.3, 2007, 14.)、『裏窓』においてステラがジェフの望遠レンズを「ポータブルの鍵穴」と呼ぶことに着目し、ベケットのテレビドラマにおける「フレーム」の役割を、ヒッチコックの映像作品を参照しつつ明らかにし、ベケットがテレビ作品を「覗き穴の芸術」と呼んだ意味を解明するために、ヒッチコックとベケットの作品を詳細に分析する方法を採った。

さらに、ヒッチコックがロンドン生まれのアイルランド系英国人であったことに着眼し、英国系アイルランド人であったベケットとの、視線や知覚をめぐる思想的・文化的共通基盤を探る予定であった。ベケットの『フィルム』の脚本冒頭にはアイルランドの聖職者で哲学者であったジョージ・バークリー (George Berkeley, 1685-1753) の「存在するとは知覚されることである (Esse est percipi)」という言葉が掲げられていること、さらに、ミラン・ボジョビッチが『裏窓』を、バークリーに多大な影響を与えたと言われるフランスのやはり聖職者で哲学者であったニコラ・ド・マルブランシュ (Nicolas de Malebranche, 1638-1715) の思想に関連づけて論じていたことから (Miran Božovič, “The Man Behind His Own Retina.” Slavoy Žižek, ed. *Everything You Always Wanted to Know about Lacan (But Were Afraid to Ask Hitchcock)* (London: Verso, 1992)、彼らの認識論や知覚論を参照しつつ、これまでヒッチコック特有の映画技法の問題に還元されてきた独特なカメラアイの背後にある思想を探り、両者

の共通点をヨーロッパの思想史・文化史という大きな文脈のなかで、ダイナミックに捉え直すことを試みる計画であった。このの研究のために、アイルランドのトリニティ・カレッジと英国レディング大学にある Beckett Archive 等で草稿と文献の調査を行うと同時に、バークリーに関しては、アイルランドでしか閲覧できない文献を調査する予定であった。また、本研究の成果は、国際学会（ヒッチコック研究が進んでいると思われるアメリカを想定）で発表するつもりであったが、COVID-19 の世界的パンデミックにより、断念せざるをえなかった。感染状況の収束を期待して本課題の研究期間を 2 度にわたって延長させていただいたが、報告者は重症化リスクが高く、5 類に移行してからも海外渡航を控えたためである。

当初から予定していた、ベケットとヒッチコックの作品視聴と分析および参考文献の読解は一貫して行ったが、研究目的は、２の最後に述べた通り、COVID-19 の感染拡大が始まった令和 2 年度以降は、ベケットとヒッチコックに共通する睡眠と覚醒の狭間に立ち現れる無意識の視覚や語りに着目し、むしろそれがどのように現代に継承されているかを日本の作品を中心に探ることにシフトした。

令和 2 年度は、当時館長を務めていた早稲田大学演劇博物館に、日本でいち早く正確にベケットの劇構造を分析し、その影響下に作品を創作した劇作家・別役実の貴重な未発表資料が大量に寄贈されたため、その新資料を用いて、別役がベケットの劇構造をどう理解していたかを明らかにし、ベケットの作品構造を分析する手がかりを得た。

令和 3 年度は、前年度の研究で得られた知見を手がかりとして、ベケットが語りや見る主体をめぐる複雑な操作によって近代的な視線や主体からいかに逃れようとしたかを考察し、『めまい』などのヒッチコック作品における見る主体の揺らぎと比較検討した。本来、令和 3 年度が最終年度のはずであったが、コロナ禍により海外での調査研究が実施できていなかったため、研究期間の延長を申請した。

しかしながら令和 4 年度もコロナ禍は収束しなかったため海外出張を断念したが、睡眠と覚醒の狭間に到来する起源の曖昧な言葉やイメージが、濱口竜介の映画『ドライブ・マイ・カー』（2001）にも見出せることを発見した。そしてベケットの『オハイオ即興曲』（1980）と合わせ鏡のように読み解くことで両者の共通点を明らかにした。この研究は、本研究で構築してきた、ベケットの『フィルム』とヒッチコックの『裏窓』を合わせ鏡のように読み解く手法を応用し発展させたものである。

令和 5 年度も前年度同様に海外での調査研究の実施を期待して延長申請を行ったが、COVID-19 は 5 類に移行したものの、重症化リスクが高いことに鑑み、令和 4 年度の研究を継続しつつ、睡眠と覚醒の狭間に到来する起源の曖昧な言葉やイメージの源流を、ベケットに多大な影響を与えたウィリアム・バトラー・イェイツにまで遡り検証した。

４．研究成果

初年度である令和元年度は、本研究の中心課題であるヒッチコック『裏窓』とベケット『フィルム』における視線の比較研究に関して、かなりの成果を得ることができた。ベケットに関しては報告者は長年の研究の蓄積があるが、ヒッチコックや映画論は本来の専門ではないため、先行研究や関連文献を網羅的に精査した。とりわけヒッチコック映画における「語り」について、クリスチャン・メッツやシーモア・チャットマンらの論を精査することで、『裏窓』における機械的、映画的な語り手としてのカメラアイの機能を明らかにした。ヒッチコック論は飽和状態と言えるほど膨大にあるものの、これは従来の論考では指摘されてこなかった点であり、ベケットと比較することではじめて明らかになったと言える。

また、本研究の独自性は、ベケットやヒッチコックの映像を詳細に分析するのみならず、その思想的背景をヨーロッパの思想史や芸術史の中に探る点にある。そこで令和元年度は、本研究の主要なキーワードの一つである「脳の眼」の源泉をベケットに多大な影響を与えたウィリアム・バトラー・イェイツらに求めるのみならず、前年度までの準備期間には手薄であったニコラ・ド・マルブランシュやジョージ・バークレーらの知覚論にまで遡って考察した。彼らの知覚論には神学的な側面が強く、さらなる考察が必要であるため、英国やアイルランドでの調査研究がコロナ禍により実現できなかったことは大きな痛手であったが、その影響についてある程度明らかにできたことは収穫であった。

成果発表としては、日本語論文は『表象 13』（表象文化論学会、2019 年）に厳正な査読を経て掲載された。令和 2 年 3 月に英国バーミンガム大学において、同大学のベケット研究者グレアム・ソーンダース教授やデイヴィッド・パティ教授らと共同開催する予定であった国際シンポジウム ”Beckett and Popular Culture ”は、コロナウィルス感染拡大とコーディネーターのパティ教授の体調不良により中止となった。

令和２年度はコロナ禍により研究方針の軌道修正を余儀なくされたが、日本でベケットの劇構造をいち早く正確に理解しその影響下に作品を創作し続けた劇作家・別役実の貴重な未発表

資料を精査して別役実によるベケット戯曲の構造分析や空間分析を明らかにし、それを補助線としつつベケットの演劇の構造を考察した。ベケットの場合は演劇と映画、テレビ等のメディア作品の創作方法が密接に関わっているためである。この成果は「祈りの演劇――別役実とベケット」（『ユリイカ』52-12，pp.47-55、2020）などにまとめた。

令和 3 年度は、当初の計画どおり、映画論、テレビ論を中心に関連文献を参照しつつ、ベケットとヒッチコックの映像作品の分析を進め、本研究の中核となる研究を推進する一方で、令和２年度に行った新資料を基にした劇作家・別役実によるベケット作品の構造分析の考察を発展させ、ベケットからの強い影響下に書かれた別役の不条理劇が前近代的な芸能における語る主体や見る主体の転換や曖昧さと深く結びついていることを明らかにし、その成果を表象文化論学会第 15 回大会において発表した。また、以上の研究成果を活かして『新訳ベケット戯曲全集 3 フィルム:映画・ラジオ・テレビ作品集』（白水社）を監訳し出版した。

令和 4 年度は、これまでの研究で、ベケットとヒッチコックがともに、睡眠と覚醒の狭間に無意識的に立ち現れる起源の曖昧なイメージや言葉を作品の中に呼び込むことで、作家の主体的な意思や理性では制御されえぬ瞬間を捉えようとしたことを明らかにしてきたことを踏まえ、同様の言葉やイメージが、濱口竜介の映画『ドライブ・マイ・カー』（2001）にも見出せることに着目した。そして同作をベケットの『オハイオ即興曲』（1980）と合わせ鏡のように読み解くことで両者の共通点を明らかにした。この成果は、「霊媒化する身体――映画『ドライブ・マイ・カー』とベケット『オハイオ即興曲』における言葉の起源をめぐって」と題した論文にまとめ、日本サミュエル・ベケット研究会創立 30 周年記念論集に投稿した。この成果は、ベケットの作品が現代の映像作品を読解する手がかりとなりうることを示したと言える。

2 回の延長を経て最終年度となった令和 5 年度は、前年度に投稿した論文「霊媒化する身体――映画『ドライブ・マイ・カー』とベケット『オハイオ即興曲』における言葉の起源をめぐって」を、査読者からの丁寧なコメントを踏まえて理論を補強し、ブラッシュアップした。本論文は、日本サミュエル・ベケット研究会創立 30 周年記念論集『ベケットのことば』に収録され、12 月に未知谷より刊行された。また、本研究で追究してきた、睡眠と覚醒の狭間に出現する起源の曖昧なイメージや言葉の源流を、ベケットに多大な影響を与えた W・B・イェイツに求める研究を行い、その成果を令和 5 年 11 月 12 日に立教大学で開催された日本イェイツ協会第 59 回大会のシンポジウム「W.B. イェイツの亡霊――イェイツ作品の共時的・通時的な文脈と影響について」において、「イェイツ、ベケット、濱口竜介の作品における言葉の起源をめぐって」という題目で発表し、高く評価された。

このように、もともと欧米での調査研究を中核としていた研究計画は COVID-19 のパンデミックにより変更を余儀なくされ、当初の計画を予定通り遂行することは叶わなかったが、その都度臨機応変に研究計画を更新し、与えられた制約のなかで研究対象を別役実や濱口竜介、W・B・イェイツに拡大した。結果的に、本研究の要諦である睡眠と覚醒の狭間に立ち現れる起源の曖昧なイメージや言葉が、イェイツからベケットを経て、別役や濱口にまで脈々と受け継がれていることを明らかにできたことは、大きな功績であると言える。

本研究終了後の令和 6 年 10 月には、ベケット研究の国際的な拠点である英国レディング大学で開催される BIF (Beckett International foundation) セミナーに講演者として招待されており、ベケット本成果を発表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡室美奈子	４．巻 1
２．論文標題 「霊媒化する身体――映画『ドライブ・マイ・カー』とベケット『オハイオ即興曲』における言葉の起源をめぐって」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 図書『ベケットのことば』日本サミュエル・ベケット研究会編	６．最初と最後の頁 145-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡室美奈子	４．巻 n/a
２．論文標題 村上春樹と濱口竜介とやつめうなぎ――映画『ドライブ・マイ・カー』における複声性をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『村上春樹　映画の旅』（早稲田大学演劇博物館）	６．最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡室美奈子	４．巻 なし
２．論文標題 「コロナ禍で待ちながら――不条理の芸術と人間の尊厳について」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『ロスト・イン・パンデミックー失われた演劇と新たな表現の地平』（	６．最初と最後の頁 202-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡室美奈子	４．巻 なし
２．論文標題 「神をもたない信仰家」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『別役実の風景』（野田映史編、論創社）	６．最初と最後の頁 268-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡室美奈子	4．巻 52-12
2．論文標題 祈りの演劇――別役実とベケット	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡室美奈子	4．巻 13
2．論文標題 浮遊するカメラ・アイ―ヒッチコック『裏窓』とベケット『フィルム』をめぐって	5．発行年 2019年
3．雑誌名 表象	6．最初と最後の頁 102-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 岡室美奈子
2．発表標題 「イェイツ、ベケット、濱口竜介の作品における言葉の起源をめぐって」
3．学会等名 日本イェイツ協会大59回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 岡室美奈子、梅山いつき、後藤隆基
2．発表標題 パネル「新資料から見る別役実の世界」
3．学会等名 表象文化論学会第15回大会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 是枝裕和、岡室美奈子他	4．発行年 2023年
2．出版社 フィルムアート社	5．総ページ数 277
3．書名 『いま、映画をつくるということ』	

1．著者名 岡室美奈子、長島確監訳	4．発行年 2022年
2．出版社 白水社	5．総ページ数 338
3．書名 『新訳ベケット戯曲全集3 フィルム:映画・ラジオ・テレビ作品集』	

1．著者名 岡室美奈子、梅山いつき	4．発行年 2021年
2．出版社 早稲田大学演劇博物館	5．総ページ数 112
3．書名 『別役実のつくりかた――幻の処女戯曲からそよそよ族へ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関